

あすなろ

何の心ありて
明日はひのきとつけけむ

憧れの人のようになりたいと
何も知らないころは思っていたもの
人は誰一人同じものでなく
たくさん生きるほど違うものになる

できないことや無理なことは
早く見切りをつけて
だけどけしてあきらめずに
自分の個性を活かして

何の心ありて
明日はひのきとつけけむ

あの人この人自分と比べて
どうして自分は思っていたもの
人は誰一人同じものでなく
良いところ磨くほどに輝いて行ける

得意なこと役に立てること
一つでも多く増やして
この世に一つのないはならない
自分の存在を求めて

何の心ありて
明日はひのきとつけけむ

砂時計

どこからか聞こえてきた
ここからはおりかえし
それは引き返すことか
通り過ぎたところに

たどってきた道をただ戻るのでなく
また違う目で見直してゆきたい

折り返しだけで終わりでなく
また何度でも繰り返す
砂がなくなれば終わりでなく
また何度でも繰り返す

誰かがつぶやいた
人生のおりかえし
それは儚い響きしか
残らないうつろさ

過ごしてきた過去を
振り返るだけでなく
また違う目で見つめなおして

折り返しだけで終わりでなく
また何度でも繰り返す
砂がなくなれば終わりでなく
また何度でも繰り返す

感動して

感動して震えた時
求めるもの何だったのか
本当は何がしたかった
わからなかったものがわかる

時間を作って
居場所も作って
毎日すこしずつ
自分のペース崩さないで

短くても狭くても
少なくとも構わない

ひらめいてしびれた時
新しいものできる予感
本当にやりたいこと
気づかなかったものに出会える

直感を頼って
心に従って
できるものすこしでも
自分の気持ち高まるように

小さくてもシンプルでも
目立たなくても構わない

萩と月

飛び跳ねて回るウサギのように
二つ結び揺れる月明かりの下

はしゃいで踊り回る賑やかな集い
たまたま巡り合ってそのまま別れた

出会いはたった一度だけ
今でも忘れない
花咲く萩を月あかりが
青白く照らすように

屈託ないように映っていても
おそらく何かを抱えていたようだ

余計なことは
一切聞かなくてよかった
大切な出会い綺麗にするために

出会いはたった
一度だけ今でも忘れない
花咲く萩を月あかりが
青白く照らすように

田舎道の幻

田舎道歩く傍ら
横切る小さな黒い影
綺麗に鳴く声が近づき
何の姿かわかる

都会でも道の片隅
声だけは聞こえるけれど
こんな風に現れること
ほとんどないと思う

自分より高い網持って
勇ましく歩く男の子
これは 15 年前なのか
それとも 50 年前

金網の虫籠の扉全開で両手にもち
足元で羽震わすその先で待ち構える
ふとみた幻これは全て儚い夢の中
あそこにいたわが子はもしかしたら
自分なのか

田舎道歩く傍ら
舗装された道がいつしか
土だけの道になったところで
ふと周り見渡す

2本の轍の間に
伸びる草むらの中から
勢いよく飛び移った先
後ろ足たたみ直す

汗と土で汚れたタオル
首に巻き歩く男の子
これは 15 年前なのか
それとも 50 年前

メダカ用の水槽わずかに土を入れて
金網の虫籠からそっと移し替える
ふとみた幻これは全て儚い夢の中
あそこにいたわが子はもしかしたら
自分なのか

かえりみて

物思う頃は遠い昔
どうしてあんなに苦しかったのか
思い切ることすこしもできないで
流されるままにいつも逃げていた

自分のことばかりで何もわからず
思いやることすらも忘れていた

だけど何もかもわかったような
図太いだけの今より
一挙一動が気になるあの頃
その大切さかえりみて

物思う頃は敏感で
どうしてあんなに悩んだのか
適当に振る舞うことできないで
うとまれることもあったのだろう

自分をよく見せることばかりで
気楽になることすらも忘れていた

だけど何と思われようとも
気にしないだけの今より
恥じらいプライド感じてたあの頃
その大切さかえりみて